

世田谷村日記

石山修武

七月五日 つづき

西谷先生と沖繩の件で話し合う。これは建築学科だけでは出来ぬ話だからバランスのとれたコーディネーターが必要である。

七月六日

今日は久し振りに何も予定が入っていない日だ。ゆっくりと色々な事を考えてみる。世田谷村市場は大事な仕事だ。フィンランド芸術工芸大学のソタマ学長に共通のマーケットを作る考えをぶつけてみようかしらん。

七月八日

昨日はよく休んだ。今朝はおかげ様で体に活力がみなぎっている。みなぎるってのは嘘だな、少々その気配がある位の事だ。

朝から晩まで地下で打合わせ。徒労なのか前進しているのか不明のまま深夜になった。

七月九日

午後毎日新聞9Fアラスカ、上山龍谷大学学長、杉浦、石山、佐藤、敦煌座談。柳橋に席を移し二二時迄。二二時三〇分車で世田谷に戻る。

七月十一日

台風が北へ去り久し振りに太陽の顔を見た。昨夜は強い西北の風が吹き、3階のメタルのテントをギシギシとゆすり続けた。建築が風に反応するのは観念としては面白いが、実際には仲々のスリルだった。勿論、メタルテントは大丈夫だったが、まるで船に乗っているような気分であった。私の家はどうやら船と飛行船の中間ぐらいの物体なのだ。しっかりと暴風雨から守られているというよりも嵐と共に在るという感じ。要するに我家は自然そのものである風がある。自慢できる事かな？これは。

明後日、気仙沼へ出掛けなければならぬので今日の午後はその準備にかかり切る。二〇年前の気仙沼、唐桑との附合いの決算報告にしたいから。しかし、思い起こせば何であんなに夢中になっていたのか今でも不思議な程に入れ込んでいたな。

十三時過、気仙沼でのレクチャー準備。五千枚以上のスライドから百五〇枚程セレクトして話の筋道を決めた。一段落したのが十九時三〇分だった。六時間ブツ通しで記録を整理した事になる。忘れてしまっていた事も多く、再発見もあつた。自分にとつても大変有意義な時間であつた。野田前宮城大学長の港町スクウェア計画も読了した。私が一九八七年から気仙沼に提案し続けたものとの基本的な考え方は同じである。明後日は自然に思っている事を言ってみる。誰に気がねする必要もないから。